

文化財だより

第28号

も く じ

平成8年度植物基本調査報告	1
平成9年度植物基本調査報告	16
田代島建物調査報告	32
志賀直哉生家建物調査報告	36
新金沼・新山崎遺跡の化学分析について	41

平成8年度植物基本調査報告

「石巻湾弁天島の植生の現況」

齊藤 紀（石巻市文化財保護委員・石巻専修大学教授）

I. 緒 言

弁天島は、石巻市中心部より東南約8.2kmにある小竹浜漁港の眼前に浮かぶ無人島（私有地）である。本島はタブノキを主とする暖地性植物に恵まれている上、自然状態がよく保たれていることから、これまでも植物学的調査研究の対象になってきた。地域的には、硯上山・万石浦県立自然公園に含まれ、第一種特別地域に指定されている。また、タブノキ林は、「仙台湾岸の植物的自然を示す代表的な原生林もしくはそれに近い自然林」として日本の重要な植物群落（環境庁、昭55）ならびに特定植物群落（環境庁、昭63）に選定されている。

また、最近の植物群落レッドデータ・ブック（日本自然保護協会・世界自然保護基金日本委員会編著）によると、本島の自然植生（複合群落）は、ランク4（緊急に対策必要－緊急に対策をこじなければ群落が壊滅する）に位置づけられている。このように本島の植生およびその自然保護・保全対策については、いま再認識がせまられている。

本島の植物相および植生調査（佐々木、1982）、特定植物群落調査（内藤、1985）はあるが、時日も経過していることでもあるので、本調査では最近の植生の状況や環境の変化の実態について調べることにした。調査担当者は、平成8年7月より同9年3月までの間、11回にわたる実地踏査にもとづき種々の記録を得た上、多くの文献と比較考察し、現段階での結論を得た。

II. 環境と現状

本島の面積は約3.6ヘクタール。地形は最高部で海拔47mの平坦部を有する南東側から、北西部に向かって緩やかに傾斜しており、西端の小高い起伏部で終わっている（別紙、地図参照）。地質は中生界－三畳系－稲井層群にあたり、おもに粘板岩で構成され、ごく一部には石英脈の露出が見られる。東北端の船着き場の鮮やかな鳥居は対岸からよく見えるが、ここからの参道は頂上の巖島神社に通じている。

北東側約180mの海を隔てて最も近く陸側と対するが、平成8年に防波堤（幅約4.5m）が完成し、連結状態となった（写真1）。立入禁止の柵や掲示はあるが、島に渡って釣り場を求める人も稀ではない。登り口から参道までは、何時しか小径ができ

踏みつけによる裸地化が進んでいる。

シカ（ホンシュウジカ）の出現も新たな問題である。今のところ、食害は全島としてはさほどではないが、糞やシカ道もあり常住化が疑われる。いずれにせよ、シカも重要な生態学的要因になりつつある。

植生景観の上から最も著しい変貌は、今より10数年前に^{しょうけつ}猖獗を極めたマツノマダラカミキリーマツノザイセンチュウによるクロマツの枯損とその後の伐倒・積材等の光景である（写真2）。北西面のクロマツ林をはじめ、ほぼ全島に散在していたクロマツの個木および個木群が壊滅的な打撃をうけた。この大きなダメージの影響や以後の植生の回復の過程については、いまだ明らかにされていない。本調査では、この部分の解明にかなりの力点を置いた。

Ⅲ. 植生の概況とマツ枯れの影響

佐々木（1982）による本島の植生の区分は、おおよそ以下のようなものである。

1. タブノキ純木（写真3）
2. タブノキ・落葉広葉樹林（写真4）
 - (1) タブノキ・イヌシデ林
 - (2) タブノキ・カシワ林
3. クロマツ林…現在は殆ど消滅、しかし回復の過程にある
 - (1) クロマツ－ヒメヤブラン群落
 - (2) クロマツ－ヤブコウジ群落
 - (3) クロマツ海崖性群落－若干のマツの下に海崖性群落は存在（写真5）
4. トベラ・ヒサカキ低木林（写真6）
5. その他の群落
 - (1) ハマギク群落（写真7）
 - (2) ニッコウキスゲ群落
 - (3) トベラ・イブキ群落
 - (4) キリンソウ群落（写真8）
 - (5) アサツキ群落（写真9）

本調査でも、再度、各立地について随時、群落を確認しほぼこの区分の妥当性を認め得た。ただ異なる大きな点は、クロマツ林の消滅したことである。同じく全島に散在した個木・個木群も減少し、現在残存する成木はさほど多くない。しかし、結論的には、幼木・若木は順調に育っており回復の途上にあるものと推定される。

その根拠の一つとして挙げられるのは、個木ないし個木群の減じた空間は、周囲の樹木の伸長や枝張りによって埋まって、階層的にも植被率は高まりつつあることである。

しかし、北西面、谷筋部中・下部ではクロマツ林の枯損によって、明らかにギャップ（林冠の穴）（写真10）が生じ、あらたな群落的動態の展開が認められる。次節の帰化植物群落の発達はそれである。

IV. ギャップに発達した帰化植物群落

北西向き谷筋的な部分には、長さ約40m、幅15mほどのほとんど林冠を欠いたギャップがある。以前ここは、上方から続くタブノキ・イヌシデ群落の一部と、下方は全島随一のクロマツ林と呼びうる林分から成っていたと見なされる。

マツ枯れ、伐倒、積材（薬剤処理のため）ではもちろんのこと、それらに要した作業による攪乱も加えて、この地一帯の空間や土壌上層部の受けたインパクトは測り知れないものがある。

現在は、大型の帰化植物が優占するが、中に目立つのはススキの枯株である。推定するに、ギャップ形成後の初期に恐らくススキが繁殖し、群落を作ったのであろう。しかし、次第にトキワアワダチソウ、ヒメムカシヨモギなどの侵入に会い、徐々に駆逐されたと考えられる。オオアワダチソウの他感作用（アレロパシー）の例のように、この地でも群落の交代にこの要因も関わったものと思われる。

さて、相観的にもこのギャップは斜面の中部と下部に分けられるが、秋期は前者にはヒメムカシヨモギ群落（写真11）、後者にはトキワアワダチソウ群落（写真12）が優占するのが見られた。

ヒメムカシヨモギ群落の他の主な構成種は、ニガクサ、テリハノイバラ、オオアレチノギク、ハマギク、タブノキ（芽生え）（写真13）であり、またオオバイボタ、ヒサカキ、トベラ、タブノキなどの幼木・若木もまばらに低木として生育している。

トキワアワダチソウ群落の他の主な構成種は、ハマギク、イ、ツタウルシ、コハマギクなどの他に、クロマツの幼木も少なくない。土壌がかなり湿潤で、若木の発達は上部ほどでない。

これらの両草本群落とも、不安定な性質を有する帰化植物でありいずれは次第に伸長する樹木群に被圧され、遷移が進むものと予想される。

V. 本島のタブノキ林の特徴と比較考察

タブノキの分布は、台湾、中国および朝鮮南部、琉球、九州、四国、本州とかなり広い。沿岸部に多いことでも知られるが、東北地方での海岸沿いに北上する様子は際だっている。北限は太平洋側では岩手県釜石市三貫島、日本海側では青森県岩崎村であるが、本県では八景島、椿島をはじめ松島湾内の島嶼が著名である。

石巻市でも牡鹿半島の沿岸沿いに若干の生育をみるが、田代島をはじめ小出島、桂島などの島嶼にはかなり纏まった林分を認めることができる。

南西日本のタブノキ林は、イノデータブノキ群集、ホソバカナワラビータブノキ群集およびオオイワヒトデータブノキ群集の3群集に分けられているが、本島のタブノキ林はこれらに該当するものではない。

本島のタブノキ林の特色は、規模の大きい極相の純林とイヌシデ、イタヤカエデ、シナノキ、オオバボダイジュ、カシワなどをそれぞれの環境に応じて混交する林分とを背腹的に有することである。これは、北面と西面では冬期、北西季節風をまともに受けるため、北方系の落葉広葉樹などが入り込むには相応しい条件だからである。このなかでも、最も風あたりの強い乾燥する場所にはタブノキーカシワ林が、幾分風をさける地形の湿潤な所にはタブノキーイヌシデ林が見られる。

日本海側沿岸のタブノキ林でも、早くにこの背腹性は報じられた(平、1978)。山形県遊佐町三崎山(町指定文化財)、秋田県象潟町付近でも海に面した北西の風衝側にはエゾイタヤ、シナノキなどの落葉広葉樹、南東の風背側にタブノキ林が発達している。

このように季節風に原因するタブノキ林の背腹性は、その程度の差こそあれ島嶼、沿岸部のいずれでも見られるが、本島のコンパクトな両群落の対比は、完成度の高い極相林とともに特徴と見なされよう。

VI. 本島の最寒月の気温について

多くの植物にとって耐寒的性質は、自然での生育や分布を決定する主要な因子となっている。特に、本州東北部の暖地性植物の北限での生態的問題は、最寒月にあたる1月の気温によって説明されることが多い。

ところで石巻地方の観測気象は、石巻測候所(石巻市泉町)の資料によることが多いが、本島のように海洋性気候の影響の大きい場所では現地のデータをもつことに越したことはない。そこで、今回は本島の神社おみこし納屋に電子式精密長期自記温度計ほか最高・最低温度計等を設置し、平成8年12月12日より測定を行い石巻市の中

心部の気温との比較を試みた。ただし、本測定は簡便的なものであり、測候所の精度・規格と隔たっていることは、念頭におかなければならない。

表1. 弁天島と石巻の1月の気温(°C)

	弁 天 島	石 巻
日最高気温平均 (同日偏差)	5.5 (2.0)	5.2 (2.6)
日最低気温平均 (同日偏差)	2.6 (1.7)	-1.4 (1.8)
日較差平均 (同日偏差)	2.9 (1.9)	6.8 (2.2)

表に見るように日最高気温については両者間に大きな差は見られない。日最低気温では、本島の2.6℃は石巻と4℃も差があり、寒さが緩和されていることが解る。日較差の格段に小さいことも、海洋性環境の影響のあることが明白である。

また、1月中の冬日(最低気温が零度以下になる日)は、石巻の24日に対し弁天島では僅か2日に過ぎなかった。これらのことから、本島は暖地性植物を育むに適した温度環境にあると言い得よう。

VII. シカによる食害の状況

本島のシカ(ホンシュウジカ)が侵入し、植物の食害、糞の残留(写真14)、シカ道の形成などの形跡を見ることは最早や明白である。11回の踏査のうち、第2回目の時には眼前に1頭と遭遇し、第3回目には茂みの中を逃走するのを認めたが、それ以後は出会うことが無くなっている。警戒して姿を現さないのか、島に定住ということではなく、海を渡るか防波堤を通るかして陸側と行き来を繰り返しているのか、全く不明である。そのいずれにせよ、シカが本島において活動していることは明らかである。目下、個体数は1頭と推定される。

シカの生息個体数と植生との生態学的問題は金華山(約1,000ha)の例が参考になる。金華山全島でのシカの推定個体数は、500~550頭とされることから、この生息密度に見合った本島での頭数は、1.8~2.0頭となる。ただ、この数字は面積上からの単純計算によるもので、餌としての植物の種組成、現存量や生産力および補正の値

などは配慮されていない。もし個体数が増えることがあれば、狭い本島のことゆえ急速に自然のバランスが崩れてゆくことは想像に難くない。早晚、詳しい調査と対応が必要とされる。

本島でのシカの主な生息場所は、上層の開けた北西斜面のギャップの部分と西部北面のススキ群落付近と見なされる。その他、全島のかなりの部分に出没する形跡が認められる。

現在のところ、食害のはっきり認められる植物には、葉や^{カン}桿および枝の先端部が食べられるススキ、オオバイボタ、ガマズミのほか、樹皮も好まれるヤマグワなどがある。中でも、ススキの食害がもっとも目立つ（写真15）。金華山で見られるような不嗜好植物の増加や樹木の盆栽化などは、まだ始まっていない。

VIII. 人為の影響

人間の生活がある限り、自然生態系のある程度の変貌はやむを得ないことではあるが、しかるべき環境影響評価や適切な行政の指導によって自然環境は、保護・保全されて行かなければならない。

本島は、小竹浜の人々が先祖代々たいせつに巖島神社を祀ってきた関係から、この植物群落はさながら鎮守の森のように、よく維持されてきた。もちろん、歴史的にも維持管理のための人為的な施業も皆無ではない模様であるが、許容範囲のもので、その結果、全島がなかなか得難い植生の地となっている。

数年を要して完成した防波堤は、漁港および沿岸整備には必要な工事ではあるが、本島の自然環境に対しては大きな脅威に成りかねない存在である。今のところ、大勢の釣り人の利用というほどではないが、今後の影響を嚴重に見守っていく必要がある。この付近では、早くも対岸から運ばれてきたと思われるアメリカセンダングサ（写真16）の移入が見られた。また、綱で登る崖の部分の浸食や参道までの小径の裸地化には早急の対策が望まれる。

マツ枯れは直接的には自然の病虫害現象であるが、その後の処置およびその作業は、かなりその地の環境にインパクトを与えていると見られる。これも、人為の影響として捉え、今後明らかにすべき問題である。要約的に述べると、伐倒された幹の多くは、各箇所を集積された燻蒸殺虫の後、放置されることになる。この野積みの材は、地面を覆いその場所の植物を圧死させる力を有している。この期間は、実に長期に及ぶ。本島の北西部を中心に、各所の^{おびただ}夥しい積材は十数年過ぎてもいまだ形態を留め、物理的障害となっている（写真17）。ことに、個体数の少ない小型の草本植物などは、この被圧によって失われる危険性がある。

IX. 追加の植物と二三の樹木の病害

佐々木（1982）の調査の際には、シダ植物以上の高等植物を60科134種（変種、品種を含む）報告している。今回の調査では、追加として新たな3科（網掛け部分）の3種を含め計9科にわたる16種の植物を認めた。以下に示す。

シダ植物

オシダ科 ワラビ

被子植物

単子葉植物

イグサ科 イ

ユリ科 カタクリ

双子葉植物

ベンケイソウ科 アオノイワレンゲ（写真18）

ミカン科 イヌザンショウ

ムクロジ科 モクゲンジ

リンドウ科 センブリ

シソ科 ニガグサ

キク科 アメリカセンダングサ、ミチノクヤブタバコ

 ダンドボロギク、オオアレチノギク、ハルジオン

 ヒメムカシヨモギ、トキワアワダチソウ、カセンソウ

反対に前回のリストの種類で、今回認められなかったものもあるが、再度、調査の必要があるので保留しておく。既報のオニノヤガラの一品种、シロテンマ（写真19）は僅かながら認められた。

森林が天然更新を繰り返していく場合、環境変化による個々の樹木の枯死の他に樹病を伴うことが少なくない。健全な森林の育成には、健康度の目安があっても然るべきと思われるが、樹勢や高等菌類に注意するだけでも幾分かの手助けとなる。ここでは、立ち枯れ樹木に形成されたサルノコシカケ類の子実体に注目して、病害の一端を知ることにした。以下に、認められた3種のヒダナシタケ目の担子菌について概略を記す。

コフキサルノコシカケ（ヒダナシタケ目—マンネンタケ科—コフキサルノコシカケ属）

広葉樹の代表的な病菌であるが、タブノキ純林中の2本の古木枯幹に発生はやや古い子実体を見る。このような外部病徴からの診断では病害発生率は低くとられるが、

内部の侵犯の状態からの判定も必要とされる。しかし、重篤な状態の個体は現在見当たらない。

ベッコウタケ（ヒダナシタケ目－タコウキン科－オオスルメタケ属）

これも広葉樹の代表的な病菌であるが、タブノキイヌシデ林中の1本イヌシデの枯幹に古い子実体が着生。しかし、今のところ他に蔓延の兆候は見当たらない。ただ、北西面のこの林分に両種の枯死体を見るのは、軽視できないことであって今後、見守る必要がある。なお、タブノキは、萌芽をだして蘇生する割合が高いと見受けられる。

ウズラタケ（ヒダナシタケ目－タコウキン科－ウズラタケ属）

やや稀に広葉樹の枯れ木や立木の枯死面に見られ、若干の病原性もあるとされるが、タブノキ純林中の腐朽著しい2本の木に着生していた。関東ではウメやサルスベリに発生が見られると言うが、この地のタブノキに認め得たことは菌学的に大変興味深い（写真20）。

樹木は齢を重ねるにつれて菌類に侵される運命にあつて、ある程度の病害はやむを得ないものがある。しかし、全般的に本島のタブノキ純林は健全と見受けられる。

X. 本島の自然保護と文化財的評価

本島の自然保護については、前述のように環境庁による選定や県立公園がらみの自然公園法による指定がある。いずれも専門的な植生調査に基づくもので、尊重、遵守すべきものである。しかし、国や県レベルの制定はごく一部の関係者が知るだけで、地元公共団体および私的土地所有者には伝達されずに終わっていることは、遺憾なことである。

また、最近の日本自然保護協会等による植物群落のレッドデータ・リストのランク4に関しては、クロマツ林崩壊の際の調査に基づいた判定によると思われる。本調査によって、ほとんど全島でクロマツ幼木は回復中である上、タブノキなどの繁殖力も旺盛であることが認められたことから、緊急の対策というような危機的状態ではない。今や、新たな問題はシカや人為の影響である。今後は、これらのアセスメントと継続的観察が必要である。

自然保護とは、なにも立入禁止にしたり、一切の管理も許さない閉鎖的維持ばかりではない。地域の発展をも保証し、国・公・民が相互に理解しあつた自然保護・保全が望まれる。

さて、本島の文化財としての評価であるが、植生的な価値や重要性については前述の通り極めて高い。ただ、暖地性植物群落の天然記念物は、既により北限に近い八景島や椿島で指定を受けており、新たな認可には難色が示されよう。むしろ、それよりは仙台湾、石巻湾の最大のタブノキ林を謳い、石巻市のシーサイドからすぐ見える密接さを説くべきであろう。

また、尾崎神社付近から生草島、弁天島と通じる植生には、さらに興味深い連続性がある。サンファン^{うた}の施設を^{うた}通って、その道にタブノキやトベラが連なるのは、東北地方では貴重な景観である。近く^{うた}の環境からも、市または県指定の文化財の候補に相応しい。

参 考 文 献

- 佐々木 豊 (1982) 弁天島植生調査報告・石巻市文化財だより11:21-24 石巻市教育委員会
 佐々木 豊 (1982) 弁天島植物目録、石巻市史編纂資料伊寺水門第5集 石巻市
 佐々木 豊 (1994) 硯上山・万石浦県立自然公園の植物相、硯上山・万石浦県立自然公園学術調査報告書 宮城県
 佐々木 豊・石塚和雄・根本智行 (1994) 石巻市田代島の植物相と植物群落 23:1-15
 平 慎三 (1978) 常緑広葉樹木の日本海側北限地帯における分布と類型、吉岡邦二博士追悼 植物生態論集:332-345
 服部 保 (1992) タブノキ型林の群落生態学的研究 I、タブノキ林の地理的分布と環境、日本生態学会誌42:215-230
 平吹喜彦・高槻成紀 (1994) 牡鹿半島駒ヶ峰に残る温帯混交林の組織と構造、宮城教育大学紀要29:33-47
 環境庁 (1988) 第3回自然環境保全基礎調査 特定植物群落調査報告書 追加調査・追跡調査 (宮城県)
 日本自然保護協会・世界自然保護基金日本委員会 (1996) 植物群落レッドデータ・ブック アボック社出版局

謝 辞

本調査を行うにあたり、御協力下さいました石巻市小竹浜漁業協同組合長 阿部國男様はじめ事務員の皆様、ならびに同浜区長 吉野雄一様に厚く御礼申し上げます。

また、植物の同定に御教示頂きました元石巻市文化財保護委員 佐々木豊様にも心から感謝いたします。

最後に、種々労を取って下さいました石巻市教育委員会社会教育課文化係の皆様がたに深甚なる謝意を表します。



写真1 弁天島の北面と完成した防波堤



写真2 壊滅的な打撃を受けたクロマツ林の跡地



写真5 南面のクロマツ・トベラ・ハマギク群落



写真6 西北部のトベラ・ヒサカキ低木林とシカ道



写真3 南東部頂上部付近のタブノキ純木の樹冠



写真4 北西部斜面のタブノキ落葉広葉樹林

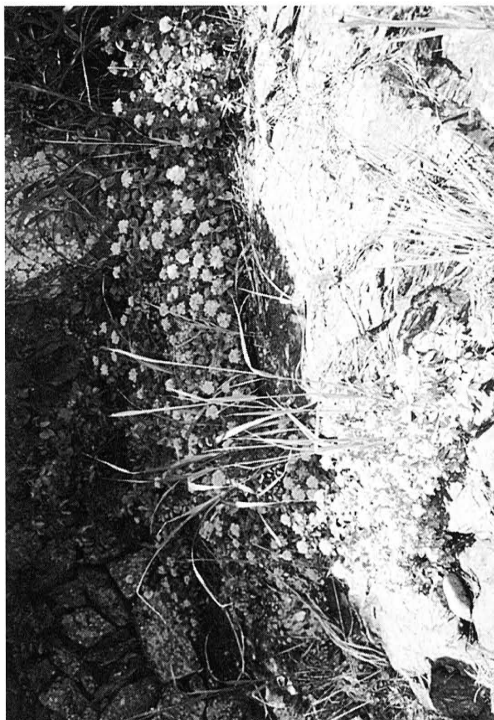


写真8 東面の日当たりのよい海崖下部のキリンソウ群落



写真9 東面の日当たりのよい海崖下部のアサツキ群落



写真7 島の周辺部の随所に
見られるハマギク群落



写真11 ギヤップに発達中のヒメカムシヨモギ群落

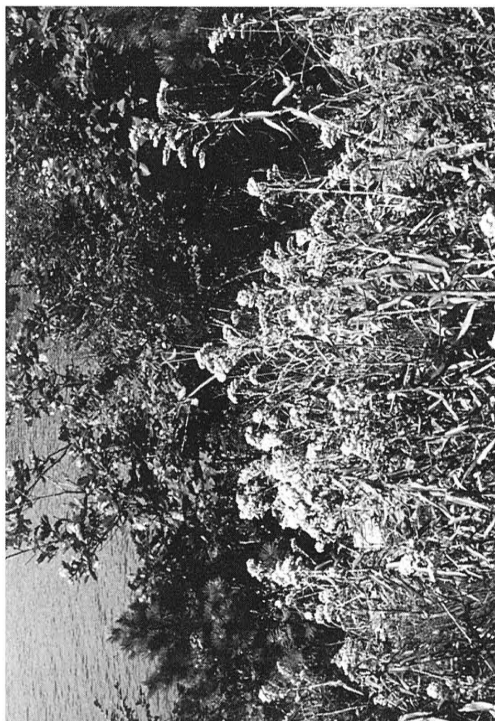


写真12 ギヤップに発達中のトキワアワダチソウ群落



写真10 北西部斜面のクロマツ林
崩壊後にできたギヤップ

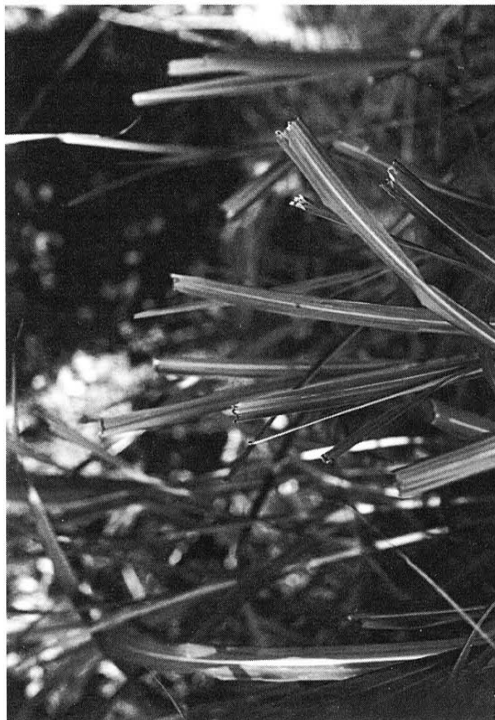


写真15 ススキ群落に残されたシカへの食痕



写真16 島の入口部に侵入したアメリカセンダングサ



写真13 ギヤップ中部に密生するタブノキの芽生え・幼木



写真14 ギヤップ周辺部に見られるシカの糞



写真19 絶滅が心配な無葉緑ラン、シロテンマ

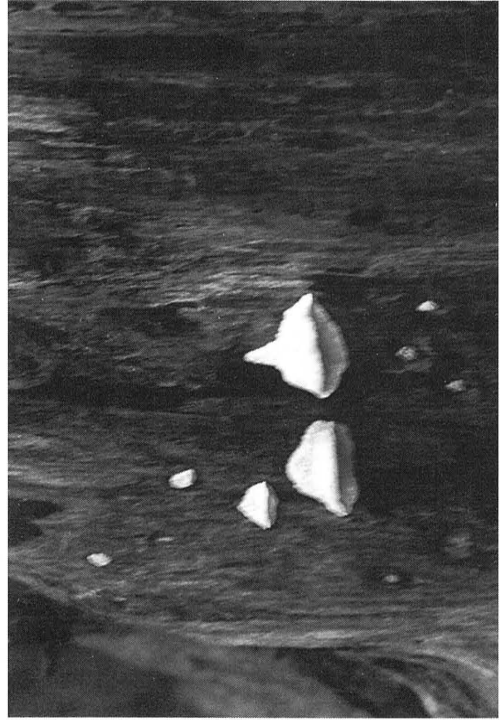


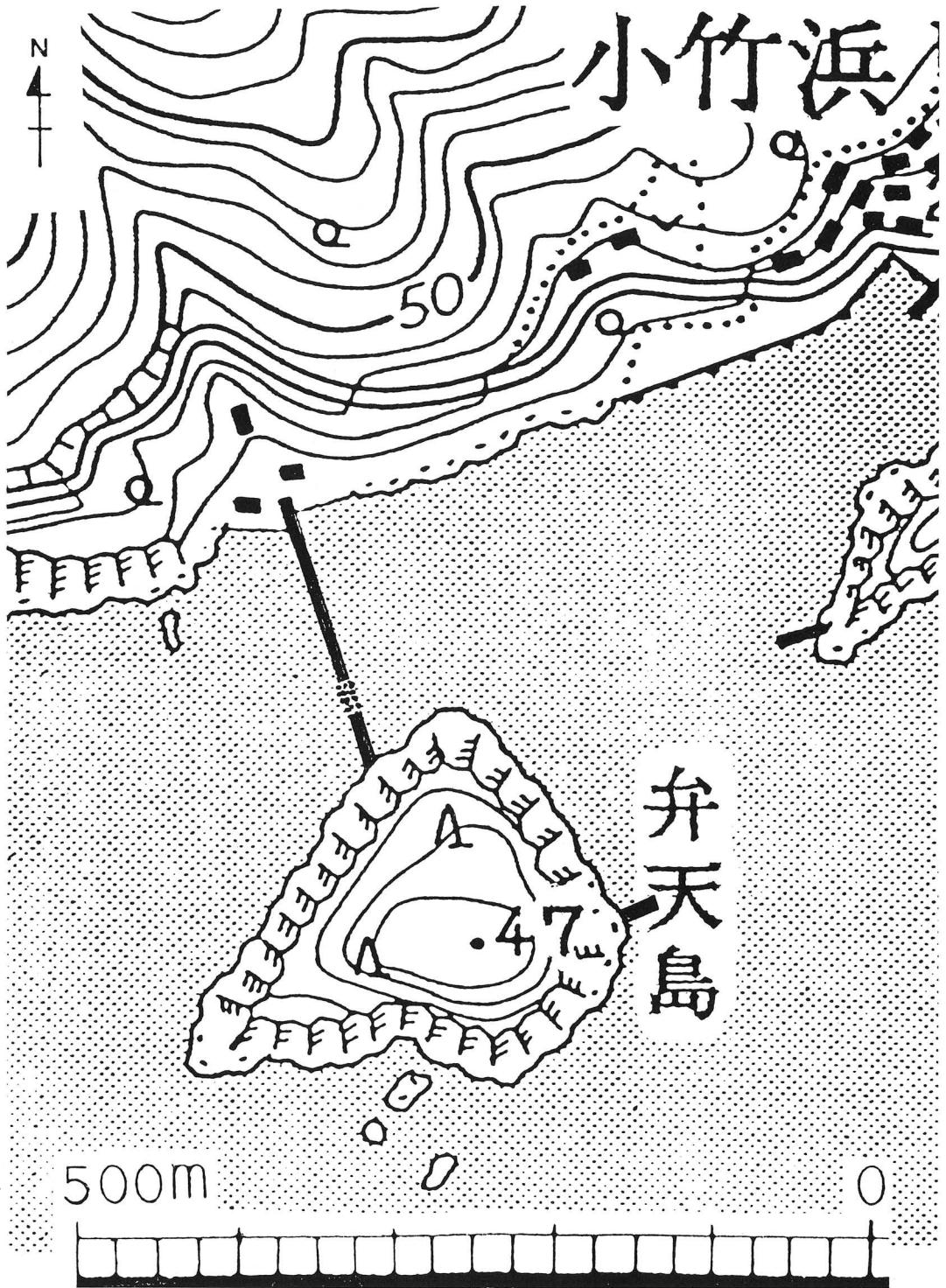
写真20 タブノキ枯幹に生育する興味あるウズラタケ



写真17 密度の低い植物には危険な長期の積材



写真18 海崖部の岩の隙間に生えるアオノイワレンゲ



弁天島とその付近の地形図（国土地理院 1/2 万 5 千図を改変・拡大）

平成9年度植物基本調査報告

「石巻湾生草島の植生の現況」

齊藤 紀（石巻市文化財保護委員・石巻専修大学教授）

I. 緒 言

生草島は、石巻市中心部の東南約8 kmにある小竹浜の西南西約1.1 kmに位置するごく小さな無人島（私有地）である。遠望からも本島は、マツの凸凹が目立つ椀を伏せたような急傾斜からなる。（写真1、2）東方450mには、タブノキ林のなだらかな線の弁天島がある。両島は、硯上山・万石浦県立自然公園の南端に当たるが、この4 haは第一種特別地域に指定されている。

国土地理院の20万分の一以上の地形図に記載されている島嶼^{とうしょ}をのせた島嶼大辞典（1991）によると、弁天島は66島を数えるが、生草の名を持つ島は本島が唯一である。

平成3年6月より2年間、宮城県で行った硯上山・万石浦学術調査では、両島の植生や植物相の調査報告（1994）も含まれている。従って、本調査では異なった視点からの植物と環境との路査や文化財保護的考察を加えることにした。

現地には、平成9年8月4日、9月5日、9月25日、10月30日の計4回渡島して調査を行った。

II. 環境の概要

本島の面積は約0.74ha、周囲は約400mにすぎない。東西と南北は最長のところで、凡そ120m、90mばかりである。島の南東部と西部には、潮の満引きで見えかくれする数個ずつの岩礁が並ぶ（写真3）。

地形は海拔25mの最高部に、東西に細長い平坦部を有するが、四方とも急峻な勾配の傾面から成る。とりわけ、傾斜角約50°の北面と約45°の西面が、それぞれ相対する約35°の南面と約40°の東面より急である。岩盤は弁天島と同じく中生代の稲井層にあたる粘板岩からなり、西北部の海崖部にはかなりの範囲に石英脈の露出が見られる。

本島の海崖の最外周部はほとんど植生を欠くが、内側には海崖性植物が散生または密生するようになる。島の景観は四周ともクロマツ林であり、過去、現在とも、いわゆるマツ枯れの被害はほとんど見られない。

西北部の一隅に、礫からなる平坦な浜があるが、そこが波浪の穏やかな際の舟を近付ける唯一の場所である。

Ⅲ. 植生の概況

海水に洗われる最外周の植生のない海崖部を除いて、本島の植生を頂上部のクロマツーススキ群落、各斜面のクロマツーハマハイビャクシン・トベラ群落、東北隅のタブノキ群落、海崖部のハマギクーラセイタ群落、アオノイワレンゲ群落と5区分して説明する。

1. クロマツーススキ群落

頂上部には東西に約25m南北に最長の場所で4mほどの平坦部があり、最も明確な階層構造がみられる。

高木層：樹高6～11mのクロマツがやや密に樹冠を構成する。胸高直径20cm以上の数本を中心に、成木20数本がこの付近に分布する（写真4、5、6）。東端のツタウルシの絡んだ直径40cmのものは、周囲の3個体とともにアイグロマツ（写真7）と見なされる。アカマツのような樹皮とクロマツより柔らかな針葉をもつが、樹脂道を表皮下にもつアカマツ（写真8、弁天島産）と違って本種では葉肉内（写真9）にある。

亜高木層：クロマツがごくまばらに空間を占める。

低木層：高さ1.0～2.0mの樹木にはハマハイビャクシン、トベラが多く、次いでヒサカキ、クロマツ、カスミザクラ（写真10）の順に多いが、全体としては密生状態ではない。

草本層：高さ1.5m以下の草本層は、植皮率が100%とよく発達している。ススキ（写真4）が最も目立つ。ハマハイビャクシン、トベラ、ガマズミ、ヤマツツジ、オオバイボタなどが疎生する。テリハノイバラ、ツタウルシ、コハマギクのほか、ヒメヤブランが広く見られる。やや北向きの場所にはタブノキの稚樹（写真11）がまとまって分布するのが特徴的である。活力も充分で、今後のタブノキ林形成への足がかりであると思われる。

2. クロマツーハイビャクシン・トベラ群落

東、南、西、北の各斜側面の上部から下部まで、場所による疎密の差はあるが、この群落が島を四周する。

高木層：樹高6～8mの曲がったクロマツ（写真12）が疎らに、または密に空間を占める。

低木層：植被率100%と発達する。ハマハイビャクシン（写真13）が密生し次いでトベラが多い。

草本層：疎生または密生する。上層のすいた所ではノブドウ（写真14）、スイカズラ、

ヘクソカズラ、アオツツラフジ、ヒメヤブラン、アマドコロのほかに、カワラナデシコ（写真15）も見られる。

3. タブノキ群落

東北斜面の下部の一隅に、群落としては高さ2.5mの低木程度の小林分を見るに過ぎない（写真16）。下層にはトベラ、ヒサカキ、ハマギクなどが随伴する（写真17）。また、付近にはノブドウ、ミツバアケビ、スイカズラなどのつる性植物がよく発達している。

4. ハマギクーラセイタソウ群落

北東部のクロマツ成木を欠く傾斜面下部には、まとまった海崖性草本植物群落が発達しているので、ここを対象に説明する。

低木層：クロマツがごく疎に生えている場所もあるが、全く欠いている部分が多い。

草本層：傾面の上部にはススキ、ラセイタソウ（写真18）、ハマギクが、下部ではハチジョウナ、ハマヒナノウスツボ（写真19）、スカシユリ、アサツキなどがその主なものである。その外、オニヤブソテツ、ハマボッス、カワラマツバなども少なくない。

5. アオノイワレンゲ群落

南東面の岩崖に少数個体のアオノイワレンゲ（写真20）が認められる。付近にはハマゼリ、ハマエノコロ、オオウシノケグサ、ハマボッスなどが見られる。

しかし、広範囲に分布している箇所は西南の海崖の一部に見られる（写真21）。凡そ長さ20m幅5mの範囲にわたって秋の開花期には、見事な景観を示す。アオノイワレンゲは人為の影響には敏感で、弁天島では昨年生育していた個体は本年度は認めることは出来なかった。

IV. 植物の目録

今回の調査で認められた植物、すなわちシダ植物1科1種、種子植物30科54種、計31科55種を次に示す。

し だ 植 物

おしだ科

1. オニヤブソテツ

種 子 植 物

裸子植物

まつ科

2. クロマツ

3. アイグロマツ

ひのき科

4. イブキ

5. ハマハイビヤクシン

いね科

6. オオウシノケグサ

7. ススキ

8. ハマエノコロ

ゆり科

9. アサツキ

10. スカシユリ

11. ヒメヤブラン

12. サルトリイバラ

13. ヤマカシユウ

14. アマドコロ

双子葉植物

(離弁花類)

にれ科

15. エノキ

いらくさ科

16. ラセイタソウ

たで科

17. ギシギシ

あかざ科

18. ハマアカザ

なでしこ科

19. カワラナデシコ

20. シオツメクサ

きんぼうげ科

21. アキカラマツ

あけび科

22. ミツバアケビ

つづらふじ科

23. アオツツラフジ

くすのき科

24. タブノキ

べんけいそう科

25. アオノイワレンゲ

26. キリンソウ

ばら科

27. テリハイノバラ

28. カスミザクラ

うるし科

29. ツタウルシ

にしきぎ科

30. ツルウメモドキ

31. マサキ

32. ツリバナ

ぶどう科

33. ノブドウ

つばき科

34. ヒサカキ

- | | |
|------------|---------------|
| ぐみ科 | くまつづら科 |
| 35. カラアキグミ | 44. ムラサキシキブ |
| うこぎ科 | あかね科 |
| 36. キズタ | 45. ヘクソカズラ |
| せり科 | 46. カワラマツバ |
| 37. ハマゼリ | ごまのはぐさ科 |
| とべら科 | 47. ハマヒナノウスツボ |
| 38. トベラ | すいかずら科 |
| (合弁花類) | 48. ヤマウゲイスカグラ |
| つつじ科 | 49. スイカズラ |
| 39. ヤマツツジ | 50. ガマズミ |
| やぶこうじ科 | きく科 |
| 40. ヤブコウジ | 51. ハマギク |
| さくらそう科 | 52. コハマギク |
| 41. ハマボッサ | 53. トキワアワダチソウ |
| もくせい科 | 54. ハチジョウナ |
| 42. オオバイボタ | 55. ヤクシソウ |
| ひるがお科 | |
| 43. ハマヒルガオ | |

V. 本島と弁天島の植生および植物相の比較

前述のように生草島は、クロマツを主にした群落であるのに対して、弁天島はタブノキの極相林とイヌシデ、シナノキなどの落葉広葉樹を混えた林分からなる。

本島のクロマツ林は、植生発達の初期の陽樹の段階にあたりと考えられる。弁天島もかつては、この様なクロマツ林から始まり、土壌が作られた場所には次第にタブノキが育つようになり、次第に陰樹林としてクロマツ林を圧倒するようになったと考えられる。ただ、季節風の当たる場所はタブノキよりイヌシデ、カシワ、シナノキなどからなる落葉広葉樹林が適応している。弁天島にも以前は、島の外周に成木からなるクロマツ林があったが、約20年前の「マツ枯れ」現象の被害で失われ、現在は若木が自然に回復中である。

本島のタブノキは前述のように、少数の低木と可成の稚樹の程度に過ぎないが、順調に成長し林分を形成するようになると見られる。推測的な見解ではあるが、何百年後にはまとまったタブノキ林が成立すると思われる。また、亜高木層や高い低木層を

構成するイヌシデ、カシワ、シナノキ、オオバボタイジュなどは、まだ本島には定着していないが、今後の遷移の過程のうちには出現することが期待される。従って本島の植生の発達を注意深く追跡することは、弁天島の植物群落の成立の解析にも役立つのである。ただ本島は、弁天島の5分の1ほどの面積を有するに過ぎないばかりでなく、急傾斜地というきびしい立地条件にあるので、植生の発達にとっても制約があると考えられる。

生草島の総種類数55のうち、ハマハイビヤクシン、トベラ、ハマギクをはじめとする海崖性植物は25種あって、約半数近くを占めるほどその比率は高い。弁天島では、全数約150種に対して、32種の海崖植物の比率は約2割と低い。生草島では、内陸の山野にあるような植物の移入が、まだ進んでいないことがわかる。今後は次第にそれらの種数を増し、弁天島の種数組成に似た方向に進展するものと思われる。

弁天島は、生草島にある種類を悉く有するが、アオノイワレンゲなどは危たいに瀕している。

VI. 本島の文化財的評価

本島のクロマツ林と海崖性植物群落は、攪乱されることなく自然状態が保たれている。最近では、島嶼でもこのような環境と植生は少なくなっているのが貴重な場所と言える。また、本島の評価はタブノキ成熟林を有する弁天島と一体として考えるとき、その価値は更に高まる。前述のように本島の植生の発達段階を時間軸で追跡し、生態学的な解析を試みるには絶好な学術的環境である。

両島は、すでにその価値を認められ県立公園の第一種特別地域の指定の中にある。本島は、渡島が困難なため攪乱を受けにくい状況にあるが、弁天島は防波堤の完成で釣人やハイカーの入島が急増している。すでに植生への攪乱の兆しは見えており、今後の重大化が憂慮される。従って本島の文化財的評価は、弁天島の植生や保全の状態に密接に関連しているのである。

一方、地元の産業振興との係わりも重要である。県立公園第一種特別地域というしぼりの中で、石巻市としてはどう対処したらよいのか、県、市、民のそれぞれの立場からの意見の開陳と相互理解がまず必要である。

参 考 文 献

- 佐々木 豊 (1982) 弁天島植生調査報告・石巻市文化財だより11:21-24 石巻市教育委員会
- 佐々木 豊 (1982) 弁天島植物目録、石巻市史編纂資料伊寺水門第5集 石巻市
- 佐々木 豊 (1994) 硯上山・万石浦県立自然公園の植物相 宮城県
- 佐々木 豊・石塚和雄・根本智行 (1994) 石巻市田代島の植物相と植物群落 石巻市文化財だより23:1-15
- 平 慎三 (1978) 常緑広葉樹木の日本海側北限地帯における分布と類型 吉岡邦二博士追悼 植物生態論集:332-345
- 服部 保 (1992) タブノキ型林の群落生態学的研究Ⅰ. タブノキ林の地理的分布と環境. 日本生態学会誌42:215-230
- 平吹 喜彦・高槻成紀 (1994) 牡鹿半島駒ヶ峰に残る温帯混交林の組成と構造 宮城教育大学紀要29:33-47
- 環境庁 (1988) 第3回自然環境保全基礎調査 特定植物群落調査報告書 追加調査・追跡調査 (宮城県)
- 日本自然保護協会・世界自然保護基金日本委員会 (1996) 植物群落レッドデータ・ブック アボック社出版局
- 日外アソシエーツ編 (1991) 鳥嶼大辞典 紀伊國屋
- 斉藤 紀 (1997) 石巻湾弁天島の植生の現況 (平成8年度植物基本報告) 石巻市教育委員会
- 菅原 亀悦 (1994) 硯上山・万石浦県立自然公園の植生 (硯上山・万石浦県立自然公園学術調査報告書) 宮城県
- 吉野 雄一 (1997) 小竹浜 (弁天島・生草島を含む) 付近の地名図

謝 辞

本調査を行うにあたり、昨年に引き続き多大の御協力を頂きました石巻市小竹浜漁業協同組合長 阿部國夫様はじめ事務員・組合員の皆様、ならびに同小竹浜区長 吉野雄一様に厚く御礼申し上げます。

また、植物の同定に御教示頂きました宮城教育大学 平吹喜彦助教授にも心から感謝いたします。

また、調査に同行など種々労を取って下さいました石巻市教育委員会社会教育課文化係の皆様方に深甚なる謝意を表します。



写真1 弁天島西端より生草島を望む



写真2 海上の南より生草島を望む



写真3 陸側より生草島東北側を望む



写真4 頂上部のクロマツーススキ群落



写真7 アイグロマツとツタウルシ

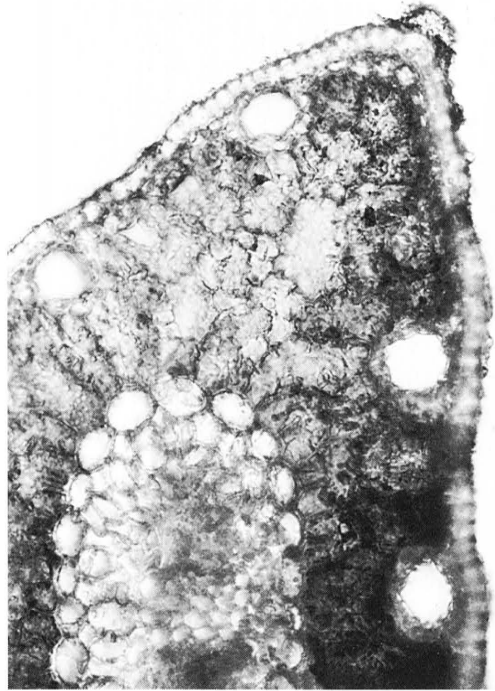


写真8 アカマツ（弁天島産）針葉の表皮下の樹脂道



写真5 頂上部のクロマツとハマハイバクシン



写真6 頂上部のクロマツとヒサカキ、トベラ



写真11 頂上部の草本層に密生するタブノギ稚樹



写真12 西面のクロマツ・ハマハイビャクシン・トベラ群落

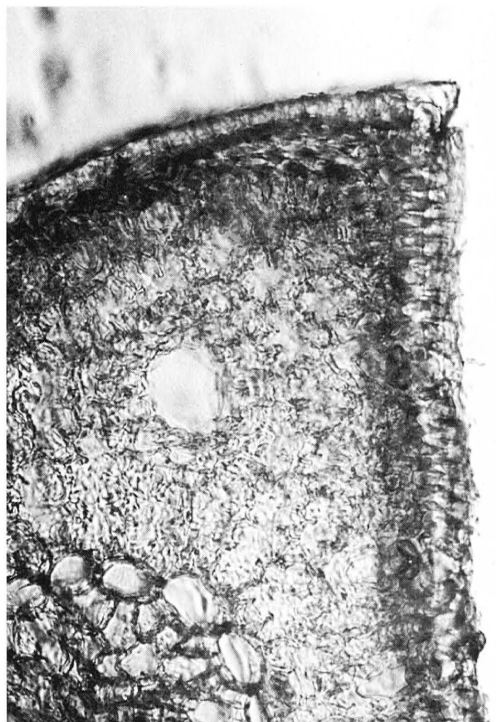


写真9 アイグロマツ針葉の葉肉中の樹脂道



写真10 頂上部の低木層にあるカスミザクラ



写真13 南面上部のクロマツ・ハマハイビヤクシン・トベラ群落



写真14 南面上部の高木・低木を欠く空間



写真15 南面上部の草本層に見られる
カワラナデシコ、カワラマツバ



写真17 最大のタブノキに随伴するトベラ・ハマギクなど



写真18 北側斜面下部のハマギク・ラセイトンウ群落



写真16 東北の斜面下部に生える
本島最大のタブノキ



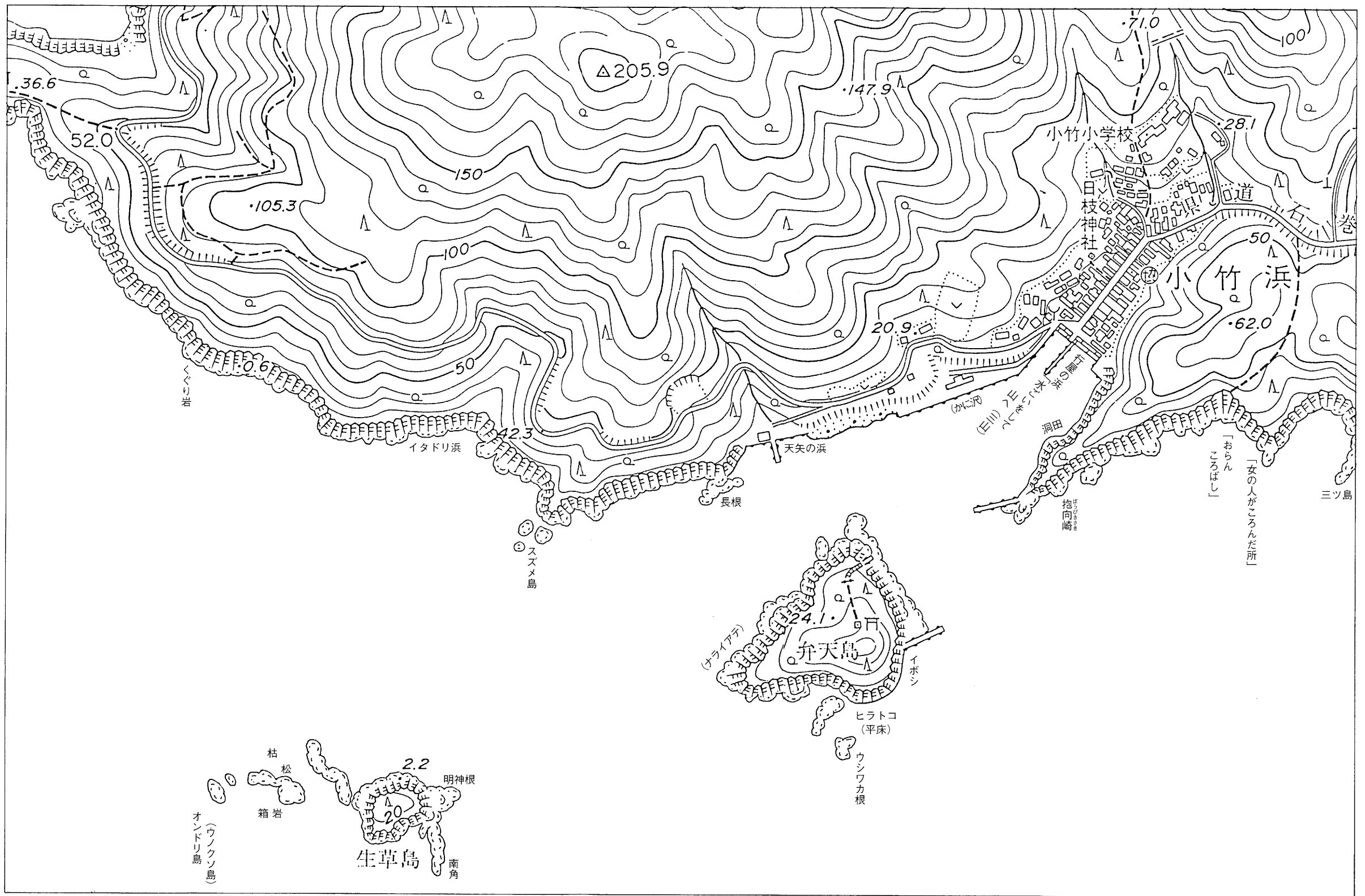
写真21 西南面海崖上のアオノイワレンゲ群落



写真19 北側斜面下部のハチジョウナ、ハマヒナノウスツボ



写真20 南東面の岩崖上の少数個体のアオノイワレンゲ





植物基本調査地点位置図

田代島建物調査

石巻市文化財保護委員 川 名 紘 一

調査実施要項

調 査 対 象	石巻市大泊 民家：津田勝彦氏所有
調 査 期 間	平成10年9月4日
調 査 主 体	石巻市教育委員会
調 査 参 加 者	社会教育課 文化係 (矢口, 岡, 木暮, 阿部)

調査の概要

この民家は、当初（明治35年頃）内海五郎兵衛所有の民家として、稲井村字水沼102番地の1に新築された。その後、大泊の津田千代松氏によって購入された。現在、この民家は漁村特有の傾斜地に集塊した部落から、離れたところに移築され空き家になっている。本調査は造立年代、並びに文化財的価値を明らかにすることを目的に行われた。

調査の結果

梁 間	9, 100 m	(30, 0 尺)	5 間
桁 行	16, 380 m	(54, 0 尺)	9 間
建 築 面 積	217, 10 平米	(65, 67 坪)	

入母屋造 和瓦葺 後世、浴室部分増築（CB造）
 竣 工 明治35年 旧4月22日

柱の太さは、1部15センチ×250センチ角を使用し、それ以外は15センチ角である。柱間は約1,820m（6尺）をモジュール（規準）にしている。ダンから上がる座敷並びに裏座敷は、もとは板敷きで台所の間仕切りも、後補である。それから正座敷と裏座敷（上部物置）この二室のみ天井が張られているが、これも後世に加えられたものだろう。

外部では屋根は瓦葺であるが、造建時は萱でふかれ、移築後、栗木羽葺に葺替えされたようである。

間取りは、当時の民家としては大きいほうであろう。土間は、作業場というよりも、調理場、置場という感じの土間庭である。

外壁も間仕切りも、すべて戸障子を建てて、極めて通風のよい開放的な間取りである。折廻縁側を設け開放的かつ、近代的な風貌である。

軸部は部屋の隅に柱をたて、柱と柱を差物（さしもの）という断面の大きな鴨居を入れて、構造体をかためる造りである。

小屋はセガイ造りと呼び、軒出を多くし且つ体裁を整える構法である。更に、セガイの先にタルキを出したもので、一層軒出を多くした、ウチムロセガイ造（三方）である。但し、後面は軒裏にタルキが見える、タルキ造（ホケ造）である。

先述のとおり萱葺から木羽葺そして瓦に葺替えられたことにより、小屋組は木羽葺の時点で、サス組から和小屋組に組替えられた。そしてタルキの上に、のる小幅の間隔をとった古材は、木羽葺当時のなごりと思われる。

屋梁と小屋束とで構成する組み方は、梁間が大きい分、小屋梁を三重梁に重ねている。したがって、下層ほど大きくなって、一本の長い太い梁を用いている。

発見された、棟札には明治35年、旧4月22日とある。

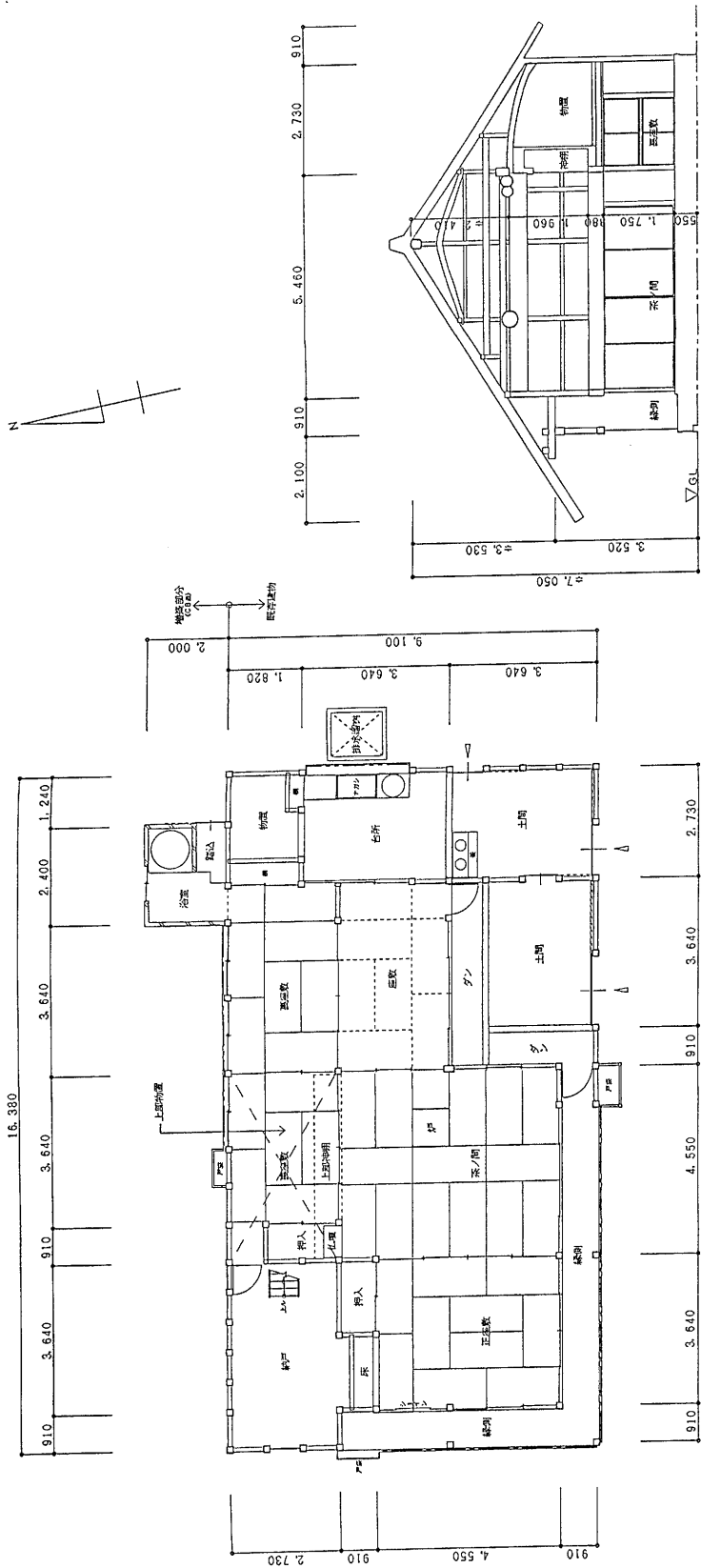
考 察

この民家は、東北地方で随所に今でも見られる、ヒロマ型四室間取りである。近世農家間取りの系統でいう近世第三期型にはいる。

この時期になると、藩令で家の規模を制定したりすることもなくなり、農民は生活上必要な客座敷など自由になった。一方、古い家柄や肝煎、庄屋、上級農民は客座敷や付属室をもつ数多くの部屋や、複雑な間取りが生まれた。そして、体裁として長押は正座敷、差鴨居は茶の間に施され、梁も良材、巨材で巨剛な組み立てになり、それが誇示にもなっていた。

津田家の民家もこの類にもれず、鉋仕上げの肌が美しく、それにススバキ仕上げをなし壮観である。

ヒロマ型間取りをなすこの民家は現在この周辺にも点在する近世農家の基本型式をもとに変遷した普遍的な民家である。



田代島建物 平・断面図

既存部分坪面積 149.05 M² (45.00坪)
 増築部分 〆 4.80 M² (1.45坪)



建物正面全景



建物裏面



建物正面



屋根裏・梁の状況



柱に残るほぞ穴

志賀直哉生家建物調査

志賀直哉の生家といわれている民家について、道路沿いの部分を建て替えすることになり、それに伴って立替え部分を中心に調査を行いました。

志賀直哉生家（菊地正義宅）建物調査

調査実施要項

調査対象 石巻市住吉町 民家 菊地正義氏所有

調査期間 平成10年10月30日

調査主体 石巻市教育委員会

木造 一部2階建て

屋根 切妻造スレート葺 柱 90×90 (三寸角)

造立年代は不明である。現在にいたるまで、数回の改造がなされた。造立時は平屋建てで東側の一部外壁面まで、切妻屋根があったものと推定される。尚、軒の高さは当時の高さと同じと思われる。室内においては、各室天井はなく、野地板、現しであったことが推定される。

志賀直哉生家敷地内の焼土確認調査について

1. 調査日時 平成10年12月25日
2. 調査者 社会教育課文化係 主査 芳賀英実, 岡道夫,
同主事 阿部篤
3. 調査結果

調査した場所は、志賀直哉生家といわれている民家の敷地のうち玄関に通じる通路を掘削することとした。掘削した面積は50cm×40cm。人力による掘削を行った。

まず井内石製の敷石（厚さ約2cm）の下に約4cmの破碎貝を混入した土の層が確認できた。

その下はシルト質粘土（※注1）を主体とした土で、多量の礫石を含んでいる。また、ビニールや錆びた釘が出土した。厚さは約25cm。この土は大まかに二つの層に分けられる。上層はシルト質が強く、下層はやや砂の混じりが多い。

この下は、礫石混じりの赤土の層である。非常に締まりのある土で、人為的に突き固められた可能性がある。ただし、調査した時間が夕方であり、時間・調査面積ともに制約があったことから、整地層かどうかを十分に認定するにいたらなかった。層の厚さは約15cm。

この赤土の層の下から焼土を確認した。現在の表土から、44cm下で確認したことになる。比熱により赤化した面と、炭化した木材が出土した。この焼面の基本土層は、赤土で礫石が混入している。この層は非常に締まりのある層で、整地のための人為的な層であることが考えられる。厚さは約4cmであった。しかし、出土する遺物が何もなく、時期を特定することはできなかった。

この下から、グライ化（※注2）した粘土混じりの砂層が確認された。この層は明らかに水性堆積によるものであり、焼土面を伴う整地層以前の状況が湿地帯、もしくは水路等があった場所である可能性が高い。

今回の調査の目的は、前回確認された焼土面の時期をできる限り確認すること、つまりこの焼土面が明治の大火のものかどうかを確認することが第一であったが、出土遺物等がなかったことから、今回の調査でもそれをはっきりさせることはできなかった。

そこで、今回確認した焼土面が明治の大火のものであったとすれば、その時に焼け

なかった旧毛利邸の建物の基礎のレベル（水平高）と、焼土面のレベルが一致するものと考え、両者のレベルを測定した。ただし、時間の制約があったことから標高を設定することができなかつたので、数値を直で読み取ることとした。

その結果、焼土面のレベルが116cm。旧毛利邸の基礎レベルが178cm。その差は62cmであった。

出土遺物から焼土面の時期を特定することは出来なかつた。そこで、現在確認できる情報を整理すると次のようになる。

- ・焼土面のレベルは敷地内でも、現表土面から26cm, 80cm（※注3）, 44cmとかなりのばらつきがあり、東に向かって急激に落ち込んでいることが確認できた。
- ・焼土面を伴う整地層と見られる赤土の下に、水性堆積が確認できた。
- ・明治期の大火で焼失しなかつた旧毛利邸の基礎レベルと、今回の焼土面とのレベルの差は62cmあり、旧毛利邸のほうが高い。

以上のことから次のように考えることが可能である。

・住吉地区は江戸時代以来、整備されてきた町であり、そうした意味において、大火時におけるこの地区全体のレベルには大きな差がなかつたと考えるほうが、妥当性が高いと思われる。今回、旧毛利邸とのレベル差が62cmと、当初考えるより大きく、また焼土面の下層が水性堆積のみで、江戸時代のもつと見られる整地層が確認できなかったことからこの焼土面が明治の大火のものより古い可能性が考えられる。

・焼土面の下層に水性堆積を確認できたことは、赤土の整地層以前は北上川岸に広がる湿地帯だったことが考えられる。この事が事実であったとすれば、今回の焼土面を伴う赤土の層は、江戸時代のものである可能性が高い。しかし、前述のとおりこの水性堆積が屋敷や街路に伴う水路であった可能性も考えられることから、現段階ではそのどちらかを特定することは不可能である。

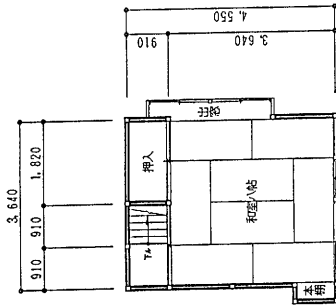
いずれにしても、今回の調査によって時期を特定することはできなかつた。

※注1 粒子の粗い砂と、粒子の細かい粘土との中間位の粒子の土。

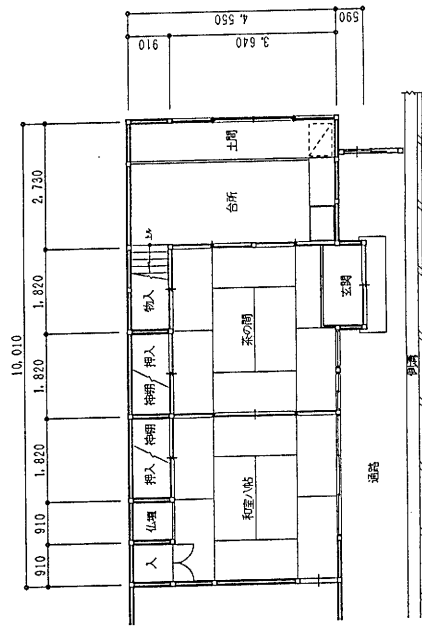
※注2 水の影響により土が青く変色すること。

※注3 工事を請け負った大工からの聞き取りによる。

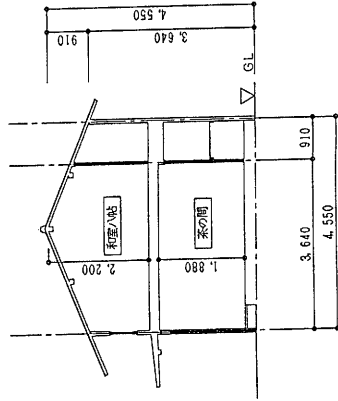
志賀直哉生家（菊地家） 平・断面図



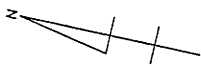
2階平面図



1階平面図



断面図





建物正面全景



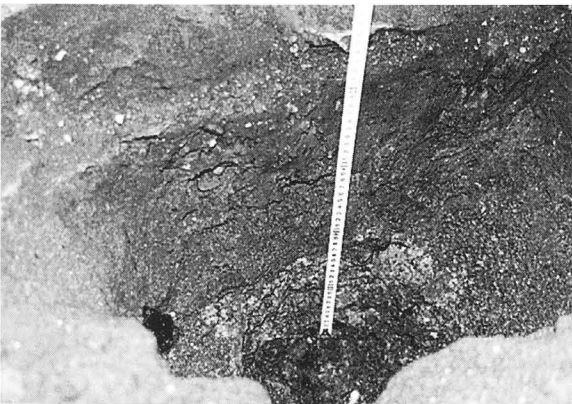
二階天井部分



調査風景



焼土調査・調査前



焼土検出状況

新金沼・新山崎遺跡の化学分析について

遺跡を発掘すると、家の跡をはじめとして、さまざまな昔の人々の生活の跡が遺構として見つかり、また、当時の人びとが使っていた土器や石器も見つかります。これらを調べることによって、その時代の人々がどんな家に住んでどんな道具を使っていたかということが分かってきますが、そのほかにも、遺跡にはわれわれに当時のことを教えてくれるいろいろなものが残っています。

例えば、稲やススキなどの植物は長い時間のあいだに腐ってなくなってしまいますが、その痕跡は「プラントオパール」という形で土のなかに埋もれて残っています。また、昔の火山の爆発によって降った火山灰なども周りに比べ白っぽい土になって残っています。また、動物の遺体も永い間にはすっかり土に帰ってしまいますが、その痕跡は「脂肪酸」というものとなって残っています。それらは化学分析で調べることによって、いろいろなことをわたしたちに教えてくれます。

石巻市教育委員会で発掘調査を行っている新金沼遺跡・新山崎遺跡では、これらのことについても調査しており、その結果、今まで分からなかったさまざまなことが分かってきました。

まず4世紀、古墳時代前期の地面を掘って作られた竪穴式住居跡が多数見つかった新金沼遺跡では、竪穴式住居跡の床の土について調べました。また、住居は廃棄され使われなくなり、土に埋まっていますが、住居を埋めていた土のなかに火山灰が混じっていたので、それがいつ、どこから飛んできたものか調べました。

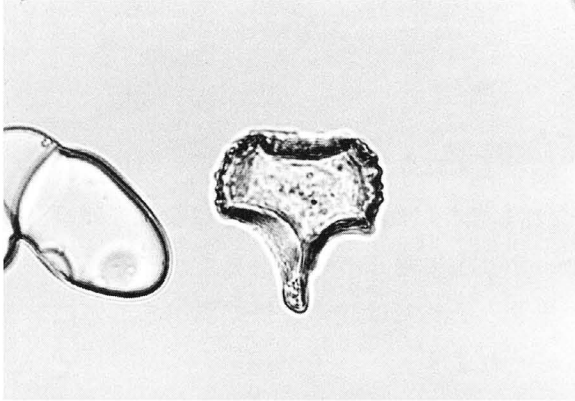
その結果、住居の床からはススキのものと考えられる「プラントオパール」が見つかりました。このことから、新金沼遺跡では、住居の床にススキなどの植物を刈ってきてムシロのようにして敷いていたことが考えられます。もしかすると遺跡の周辺は、ススキなどが多く生い茂る草原のような環境であったかもしれません。また、火山灰は平安時代、10世紀の青森県・十和田湖が噴火した際に飛んできたものであることが推定され、その埋まり具合から、遺跡から人びとが去ったあと、永い間人が住んでいなかったことがわかりました。

新金沼遺跡と同じ4世紀の墓である「方形周溝墓」が見つかった新山崎遺跡では、遺跡の土のなかからヨシなどのプラントオパールが見つかり、また、墓を取り囲む溝に埋まった土のなかから火山灰が検出されました。

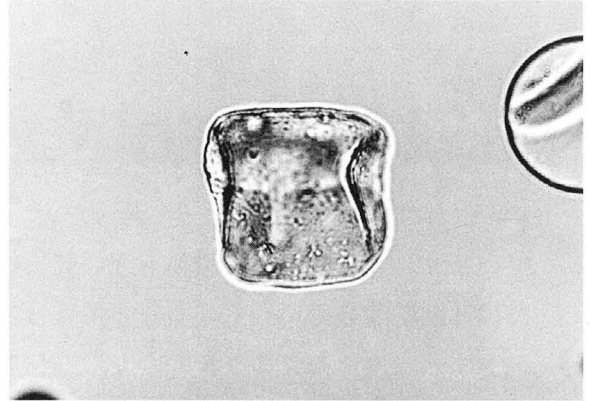
これも、新金沼遺跡と同様に、新山崎遺跡が昔はヨシが多く生える湿地帯か草原のような土地であり、遺跡から人がいなくなってから、生活の痕跡が現れる平安時代以降、鎌倉・室町時代までの間人がここで生活していなかったことが推定されます。

このように、遺跡に残る非常に小さなものを丹念に調べることによって、これまで

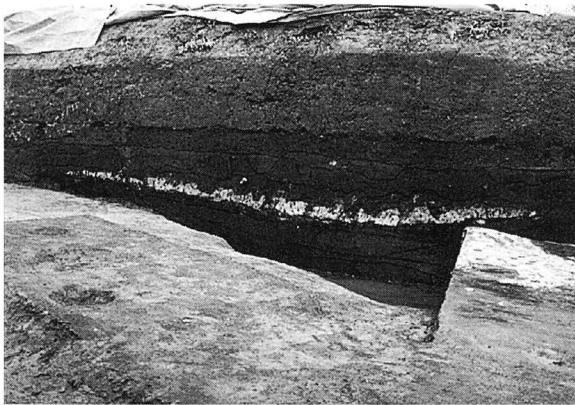
分からなかった遺跡の自然環境，人びとの生活の様子をよりいっそう明らかに復元できるのです。



ススキ属のプラントオパール



シバ属のプラントオパール



灰白色火山灰（白く見えるところ）

石巻市内所在指定文化財一覧

(平成11年3月現在)

《 国指定文化財 》

名 称	員数	指定年月日	所 在 地	所 有 者	時 代
重要文化財 岩版	1	昭36. 2. 1	石巻市住吉町一丁目8-29	毛 利 伸	縄 文
史跡 沼津貝塚	1	昭47. 10. 21	石巻市沼津字出外		縄文～弥生

《 県指定文化財 》

名 称	員数	指定年月日	所 在 地	所 有 者	時 代
牡鹿法印神楽	1	昭46. 3. 2	石巻市湊字牧山1-1	(代表) 桜谷守雄	
仁斗田貝塚	1	昭50. 4. 30	石巻市大字田代浜字仁斗田		縄 文
鳥屋神社奉納絵馬 『奥州石ノ巻図』	1	昭63. 11. 29	石巻市羽黒町一丁目7-1	鳥屋神社	近 世

《 市指定文化財 》

名 称	員数	指定年月日	所 在 地	所 有 者	時 代
多福院板碑群	88	昭50. 6. 1	石巻市吉野町一丁目1-9	多福院	中 世
平塚ツナ家文書	739	(第1次) 昭51. 6. 1 (第2次) 昭53. 4. 1	石巻市南浜町一丁目7-30	石 卷 市	近 世
旧石巻ハリストス 正教会教会堂	1	昭55. 12. 20	石巻市中瀬3-18	石 卷 市	近 代
潮 音	1	昭55. 12. 20	石巻市南浜町一丁目7-30	石 卷 市	現 代
イチョウ(吉祥寺)	2	昭55. 12. 20	石巻市高木字寺前48	吉 祥 寺	
イチョウ(龍泉院)	1	昭55. 12. 20	石巻市水沼字天似113	龍 泉 院	
葛 西 椀	3	昭56. 5. 18	石巻市大瓜字棚橋168	龍 洞 院	中 世
黒 潮 閑 日	1	昭56. 5. 18	石巻市南浜町一丁目7-30	石 卷 市	現 代
石巻市渡波 獅子風流	1	昭56. 12. 19	石巻市渡波字西ヶ崎11	(代表) 津田富志義	
漁 夫 像	1	昭57. 12. 15	石巻市南浜町一丁目7-30	石 卷 市	現 代
宝 篋 印 塔	1	昭61. 12. 1	石巻市湊字牧山5番地	零羊崎神社	近 世
相 輪 檣	1	昭61. 12. 1	石巻市湊字牧山5番地	零羊崎神社	近 世
零羊崎神社奉納 絵馬(白馬の図)	1	昭61. 12. 1	石巻市湊字牧山5番地	零羊崎神社	近 世
零羊崎神社奉納 絵馬(黒馬の図)	1	昭61. 12. 1	石巻市湊字牧山5番地	零羊崎神社	近 世
長禅寺「扁額」	1	昭61. 12. 1	石巻市湊字牧山5番地	零羊崎神社	近 世
銅造菩薩立像	1	平元. 7. 31	石巻市渡波字仁田山2	洞 源 院	古 代
銅造薬師如来立像	1	平元. 7. 31	石巻市高木字竹下75	日 野 孝 栄	中 世
銅造阿弥陀如来立像	1	平元. 7. 31	石巻市高木字竹下75	日 野 孝 栄	中 世
銅造観音菩薩立像	1	平元. 7. 31	石巻市高木字竹下75	日 野 孝 栄	中 世
木造観音菩薩坐像	1	平元. 7. 31	石巻市羽黒町一丁目1-27	永 巖 寺	古代・中世
木造薬師如来坐像	1	平元. 7. 31	石巻市真野字萱原2	長 谷 寺	中 世
渡波塩田つほ打ち唄	1	平4. 6. 1	石巻市流留字赤坂前7-1	阿 部 亀 雄	

石巻市教育委員会文化財関係刊行物

- 石巻市文化財調査報告書第1集 水沼字窯跡発掘調査報告
石巻市文化財調査報告書第2集 石巻城跡 - 奥州葛西氏館跡の調査 -
石巻市文化財調査報告書第3集 五松山洞窟遺跡 - 発掘調査報告 -
石巻市文化財調査報告書第4集 田道町遺跡 - A地点発掘調査概報 -
石巻市文化財調査報告書第5集 田道町遺跡 - B・C地点発掘調査概報 -
石巻市文化財調査報告書第6集 箕輪山 - 石巻市大瓜箕輪山貝塚における埋蔵文化財調査報告 -
石巻市文化財調査報告書第7集 田道町遺跡

石巻市文化財だより第1号～第27号

- 石巻市文化財だより別集・鑄銭場関係資料『金局公用誌』一
石巻市文化財だより別集・鑄銭場関係資料『金局公用誌』二の上
石巻市文化財だより別集・鑄銭場関係資料『金局公用誌』二の下
石巻市文化財だより別集・鑄銭場関係資料『金局公用誌』三
石巻市文化財だより別集・鑄銭場関係資料『金局公用誌』四
石巻市文化財だより別集・鑄銭場関係資料『金局公用誌』五

- 文化財たんぼう 1
文化財たんぼう 2
文化財たんぼう 3
文化財たんぼう 4

文化財マップ - 遺跡編 -

文化財マップ - 名所・旧跡編 -

石巻市文化財だより (第28号)

平成11年3月25日 印刷
平成11年3月31日 発行

発行：石巻市教育委員会
石巻市日和が丘一丁目1番1号
電話 (0225) 95-1111 内線 345

印刷：株式会社 鈴木印刷所
石巻市蛇田字新谷地前121
電話 (0225) 22-4101

